慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	朝鮮史の栞(今西龍遺著, 近澤書店刊行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.179(361)- 181(363)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

何人も之を爲し得なかつた爲であらう。本書の出版に依て、多くの研究家が如何に多くの利便を與へらるゝかは言ふまでもない所である。本書に依て大なる思想を受けつゝある一人として著者の絶大なる努力と根氣に對してこゝに敬意を表すると共に、本書を廣く江湖に推薦する次第である。（今宮新）

唯一神道名法要集（河野省三氏解說 國民精神文化研究所刊行）

本書は、國民精神文化文獻三、と銘打つて、國民精神文化研究所から公にされたもので、附錄として同所研究囑託河野省三氏の解說がついてゐる。

我が神道史上に、最も大なる組織を有し、近世の信仰、思想に最も著しい影響を與へた神道說の一つは、室町時代の後半期初頭に興つた吉田家の唯一神道で、（元本宗源神道、吉田神道、卜部神道）之を大成したものは吉田兼倶であり、（後花園天皇永享七年（一四三五）—後柏原天皇永正八年（一五一一））更にその學說を詳述したものが唯一神道名法要集なのである。

本書の奥書は、萬壽元年七月、兼倶の遠祖兼延の述作となつてゐるが、萬壽年間卽ち、後一條天皇頃の思想的產物とは到底思はれず、平安朝末期から鎌倉時代の初期のものとしても、更に、建武中興當時のものとしても尙早の感深く、之を神道學說の發達、哲學的思索の過程、神儒佛三敎の調和の展開、吉田神道の進步、或は思想史の進展といつたやうな種々の方面から考察して應仁、文明、延德の時代相を背景とし、之を兼倶に持つて行くのが最も自然であり、最も多くの妥當性を持つてゐるのである。

本書本文九丁ウラに、「第卅四代推古天皇御宇上宮太子奏言吾日本生二種子一。震旦現二枝葉一。天竺開二花實一。故佛法爲二萬法之果實一。儒敎爲二萬法之枝葉一。神道者爲二萬法之根本一云云」とあるのは、所謂三敎枝葉花實說と稱する、神儒佛三敎の極めて巧妙な調和說であつて、兼倶の思想に於いて最もよく展開したものである。

十三丁ウラに、「國者是神國也、道者是神道也、國王者是神皇也」とある一節も、亦注目に値する思想であつて、吉田家の唯一神道の根本的信念であるともいへるのである。就中、神皇の語は、神としての天皇、太祖天照大御神の御子としての天皇と意味するもので、皇道思想の基調である。要するに、神國といひ、神道といひ、神皇といひ、共に相集つて皇道の精神を形成し、惟神（かむながら）の信念を表現するのである。

最後に、本複製は、稀覯の快尊本によつたもので、氏は、これを以て、從來の本書に對する見解を新にする根據を與へるとなし、卜部氏の系圖が、兼倶に終つてゐる點から、故八代博士が、續群書類從本によつて、この書は兼倶の曾孫兼右の述作であらうとされた推測は自然に解消するといはれてゐる。

要するに、本書は、室町時代に於ける國民精神の自覺、日本精神の一展開を示すものであつて、日本思想史日本神道史等の研究を裨益するところ尠くないと信ずる。（淺子勝二郎）

朝鮮史の栞（今西龍遺著 近澤書店刊行）

本書は、今西博士の遺稿の第三册で、「朝鮮史の栞」、「朝鮮史概說」、「朝鮮の文化」の三篇を收めてゐる。

先づ、最初の「朝鮮史の栞」に於いては、その大要を知る上に必要な林泰輔氏の朝鮮通史以下の書目を紹介され、次に、朝鮮史の大系をなす史籍として、三國史記、三國遺事を始めとして、紀事類、例へば、英廟紀事、正宗紀事から小說隨筆類、例へば、倉介樓外史、廣史、大東野乘等を細密に解說し、高句麗、百濟、新羅の三國各々國史修撰のことあり、その他、紀錄、野乘の類も多少作成せられたが、今日に傳はるものは皆無で、朝鮮で撰ばれた史籍で遺存せるもので最古のものは、三國史記と三國遺事とであつて、之は共に、王氏高麗朝の撰に過ぎないが、今日この書を外にしては、半島史籍にして、三國の形勢を詳に記したものはないとし、三國遺事に就いては、本書撰述の目的は、その書名、その內容より推測するに、正史、卽ち、三國史記に載せざる三國の所傳、談話を收錄するに在り、本書に載するところの新羅の鄕歌十數首は、我が萬葉古歌に比すべきもので、その文亦萬葉體なるを以て、文語學上貴重なものであるが、今日之を解し得る者無きを遺憾とせられ、次に駕洛加耶任那の研究に必要貴重なる駕洛國記を擧げ、東國通鑑を說いて本書は、三國史記、三國遺事、高麗史その他二三支那史籍の記事を編年體に書き改めたに過ぎず、研究用として探るべき點なけれど、三國史記、高麗史の紀傳體なるに反し、編年體なるところに便利の點多く、この事は研究上の要求なき朝鮮人間に、他の二書を壓倒して盛に行はれ、朝鮮にて史籍の稱は直ちに本書を想起せしむるに至つたとし、終に野史小說の類

も往々貴重なる史料を含むことを注意せられてゐる。

次に、地誌類としては、三國史記地理志、高麗史地理志、慶尙道地理志（慶尙道地理志續撰）世宗實錄地理志、新增東國輿地勝覽、增補文獻、備考輿地考、宣和奉使高麗圖經、八城志、東京雜記、中京志、平壤志、星湖僿說類撰地理門、我邦疆域考、海東繹史續地理考、靑邱圖、大東輿地圖等が擧げられてゐる。

第二は朝鮮史概說であるが、人種學者は、Korlo-Japanese group を認めるが、日本人と朝鮮人とが別れたのは、歷史以前に在つて甚だ古く、僅にその痕跡を言語と體質とに殘すに過ぎず、畢竟人種の問題で、歷史の問題に非ず、朝鮮人にしたところが、半島の原住民なりや、或は後住民なりや疑問であるとし、從來世に信ぜられてゐた、朝鮮の二開國說、卽ち、箕氏開國說と檀君開國說とに就いては、國民思想をよく表現してゐるとして詳述せられ、衞滿の朝鮮國はその實國名（政治的稱呼）に非して地方名であることを明かにし、樂浪郡の設置は倭人と漢人との交通を容易ならしめ、その交通は朝鮮江華の方面より沿岸を南下し、今の金海地方に至り、對馬、壹岐を經て九州に入り、更に瀨戸內海を東航して、畿內地方に入つたのであり、山陰道沿岸の航路は未だ起らなかつたらうと、疑つてをられる。本項は併合前まで、卽ち李氏朝鮮まで述べられてゐる。

最後は朝鮮の文化で、總說から朝鮮の佛敎まで、すべて十三項である。

本書の內容は、簡明平易、通論の體を失はず、大體に通じ、大意を曉らしむるを旨として記されたもので、その目的は十分に達

成されてゐると思ふ。一讀を薦める次第である。（菊判本文二四七頁、圖版五、定價二圓五十錢）（淺子勝二郎）

房總里見氏の研究（大野太平氏著　千葉市寶文堂書店發行）

本書は著者が曩に編纂せられた「安房人物志」に、里見、正木兩氏を除いては安全な安房房人物志とはいへないとの見地から兩氏の傳記（前者が中心になつてはゐるが）を加へて、それを集大集せんとする意圖の下にものされた一つの勞作なのである。

本書は表題の示す通り房總に於ける里見氏の研究であつて、家基以前は略説に止つてゐる。房總里見氏の時代は普通義實が文安二年に安房を平定してから、慶長十九年の忠義の改易に至るまでの十代百七十年間となつてゐるが、これを大體二つに分けることが出來る。卽ちそれは第一代義實から成義、義通、實堯、義豐に至る五代九十年間と、第六人義堯から義弘、義頼、義康、忠義に至る五代八十年間とであつて、前期は里見氏が安房と上總の一部とを領有してゐた時代で、勢力も微々たるもので、事實地方の一豪族に過ぎなかつた時代であるが、後期は勢力を得て領土を擴張したばかりでなく、他の諸豪族、就中北條、上杉、武田の三氏と密接な關係を有するに至つた時代である。

里見氏に關する諸書、諸記錄は、多くは寛永以後のものではあるが、これには編述者の地方別によつてその內容に相異を認めることが出來る。卽ち、江戸方面で書かれた「關八州古戰錄」、「北條五代記」、「關東管領記」等々は地理上の誤多く、歷史的にも不合理の點があり、北條氏の舊臣や子孫の手に成つたものには曲筆とも思はれる點もある。之に反して房總方面の「里見代々記」、「里見九代記」、「房總里見誌」、「房總里見軍記」等は、多くは里見氏の舊臣の子孫には地方の好古家のものしたもので、これ等には地理上の誤謬は少く、歷史系統の上にも不合理の點は少いが、やはり曲筆もあり、誇張もあり、誤謬もあるのである。

著者は從來の里見氏の研究に於ける錯誤の諸點を、大體年代、地理、出自、同名の四つに分け就中年代錯誤の研究訂正に力を入れ、これが本書の特徵をなすものともなつてゐる。

最後に「里見氏の制度及文化の一班」と題して、制度の概要及法制の一班、民政及財政、軍事、交通、里見氏歷代の信仰、學藝及習俗等を説き、附錄として里見氏世紀、正木氏世紀、集成里見系譜、集成正木系譜、房總里見時代年表、地圖二葉、索引を添へてゐる。

本書は實に著者二十年間の辛苦の結晶であり、單に里見氏の傳記たるに止らずして、地方史として、更に廣く戰國時代史の一部とも見られる個所もあり、一讀得るところ多からんと信じ、敢て江湖に薦める次第である。（菊版本文六百頁、定價三圓五十錢）（淺子勝二郎）

漢學者傳記及著述集覽（小柳司氣太監修　小川貫道編　關書院發行）

江戸時代儒者の述作書目として知られたものは從來その數決し